

---

# Death Desire

神無月帝婁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Death Desire

### 【Nコード】

N3712A

### 【作者名】

神無月帝婁

### 【あらすじ】

この世界は退屈だ。楽しい事なんて何一つない。生きている意味なんてない。だったらいつそ死んであの世に行った方が・・・そうして自殺をはかる少女瑠莉香<sup>るりか</sup>。どうしようともお前は死ねないと瑠莉香に告げる死神紅闇<sup>くあん</sup>。これは死を追い求める少女と少女を取り巻く者達の物語。

## ブローグ

なにも変化のないつまらない毎日。ただ同じ事の繰り返し。朝起きて、朝のニュース番組を見ながら朝ご飯を食べて（たまに食べないで・・・）毎日同じように学校に行って、同じような顔ぶれが並ぶ教室で、内容は変わるけど、雰囲気は何も変わらないつまらない授業を受ける。クラスメイトと昨日見たドラマの話やくだらない話なんかして、何がおもしろいのかもわからないまま友達に合わせて笑う。誰かの悪口を言って笑う。ねえ、なにがそんなにおもしろいの？

学校が終わったならうちに帰る。部活なんて入っていない。だってめんどくさいじゃない？うちに帰ったら着替えて、適当にゴロゴロして・・・そうして一日が終わる。ほとんど毎日こんな感じ。これの繰り返し。変化なんて多少はあったとしても大きくは変わらない。日々が変わるわけじゃない。つまらない毎日。こんな世界で生きる意味なんて、きっとない。死んだらことは別の世界に行くって言うけど、一体どんな所なんだろう？わからないけど、きっと・・・ううん、絶対こんなつまらない、くだらない世界なんかよりはずっと楽しいと思う。こんな世界なんかに未練なんてない。だから・・・死んでもいいよね？

私は机の引き出しからカッターナイフを取り出した。中学の美術で使って以来ずっと使われることなく机の中にしまってたけど、奇跡的にさびついてはいなかった。カッターの刃を出し、深呼吸をする。

「お父さん、お母さん。先立つ不幸をお許し下さい・・・なんてね・・・」

両親が私の死体を見つけるのはいつだろう。うちは両親共働きで、しかも二人とも忙しい人で基本的にはいない。私は昔からいわゆる「鍵っ子」というやつだった。中学の頃、一度無断外泊をし

たことがある。3日ほど家には戻らなかった。その間、一度も両親から連絡が入ることはなかった。ただ気づいていなかったのか、それとも気づいていたけどわざと何も言わなかったのか・・・そこは結局わからない。だけど、どっちにしてもなにか違うと思わない？だから、私の姿が見えなくても、きつと両親は気にもとめないだろう。まあ・・・今更だし、どうでもいいけどね。

もう一度、今度は大きく深呼吸をし、カッターの刃を手首に当て、思い切り引く。痛い・・・当然だ。私はカッターで手首を切ったのだから。血管を深く傷つけたためか、血が大量に流れ出す。血って赤いと思ってたけど黒いんだな・・・死ぬ前にちよつとおもしろいこと発見しちゃったな。ああ・・・意識が遠くなっていく・・・私、死ぬんだな・・・これでやつと退屈な毎日から抜け出せる。さようなら、つまらない世界・・・私はずっと目を開けた。

## 第一幕

ピピピピピピピピピピ．．．．．

けたたましく朝の訪れを目覚まし時計が告げる。午前六時三〇分。  
いつも通りの朝。

「う．．．ん．．．．．」

その音に反応し、いつものように目を覚ます。朝か．．．．そう  
つぶやき、手首に痛みを感じて顔をしかめる。そうか．．．昨日力  
ツターで切ったんだっけ．．．と、そこで自殺をしようとしたこと  
を思い出す。床には大きな血溜まりができた。もちろん、自分の血  
だ。これだけの血を流しておいて死なないなんて、人間というもの  
は意外と丈夫だ。

「絶対に死んだと思ったのになあ．．．．」

そう、誰に言うでもなく呟く。

「お前は死ねないよ、庚瑠莉香<sup>かのえるりか</sup>」

背後から急に声をかけられた。しかし不思議と驚きはしなかった。

「誰？」

振り向きながら訪ねる。ここは自宅の自分の部屋。自分以外他に  
誰かがいるわけがない。居る可能性があったら親であるが違う  
というの是一目みてわかる。だとしたら．．．．どろぼう？にして  
はそれらしくない．．．．ほっかむりつけてないしヒゲ生えてないし．  
．．．なにより．．．．イケメンだし！は．．．．もしかして

「変質者．．．？」

「誰が変質者だ！　たく．．．．俺は紅閨<sup>くおん</sup>。死に神だ」

しにがみ．．．．？しにがみ．．．．死に神って．．．．あの死に神  
よね．．．．

「．．．．．つばくない」

私は死に神、紅閨に思いつきり疑いの眼差しを向けて言い放った。  
「それはお前達人間が勝手に想像をして作り上げた固定観念だ。」

俺たち死に神からしてみたら、人間が思っているような、黒いロブにでかい鎌をもっているという姿の方が不自然だ」

なるほど。そう言われてみれば説得力はあるかもしれない。確かに誰かが実際に見たというわけではない。例え見たことがある人がいたとしても、正確に覚えているというわけでもないし、まして人から人に伝言ゲームのように伝わっていったのだ。途中で尾ひれ背びれつけられて変わっていくのは当然である。人魚を見た！といって、綺麗な女性の下半身だけが魚のようであったとかいう話が広まった。けど実際はただの岩場に乗り上がったジユゴンであったとか、まあそんな感じである。ふと、私はあることに気づいた。死に神が見える＝私死？

「なんだ、死ぬこと成功してるじゃん！」

「だからお前は死ねないと言っただろ。ニワトリなみの記憶力だな。庚瑠莉香」

一瞬抱いた希望を即座に壊された。しかもニワトリなみの記憶力って・・・はつきり言って失礼極まりない言い方である。傷ついた。なんなんだこいつは・・・！それに・・・

「あんた、なんで私の名前知ってるのよ」

死に神だからってなんでも知っているということはないはずだ。

そして私も名乗った記憶はない

「死に神だからだ」

・・・私が否定した事をさらに否定してくれた・・・なんか・・・こいつ嫌いだ。

「で、なんで私は死ねないわけ？」

当然の疑問をぶつける。人間いつかは必ず死ぬものだ。遅かれ早かれ必ず死というものは訪れる。生きているもの全てにあるものだ。例えそれを望んでいようがいまいが、必ず。それなのに私だけ死ぬことができないなんて事はない。自殺だから死ねない？そんなわけではない。もし死ねないなら、死因が自殺という事はないのだから。なぜか紅閨は黙っているっていうか目が泳いでいる。少しば

かり落ち着きがなくなつたような気がする。これは明らかに動揺している。なにか、ものすごく大変な理由でもあるのだろうか・・・？そんなことを考えていると、やがて紅闇はゆっくりと、静かに話始めた。

「いや・・・まあ・・・あれだ・・・お前の寿命を・・・書き忘れた・・・」

「はあ？」

「いや、だから・・・人間の誕生日つてのは天使が決めて、書類に書くわけだ。で、その書類を冥界で受け取って、死に神がその人間の寿命を書くことになってるんだが・・・その時・・・お前の寿命を書き忘れた・・・」

「誰が？」

「俺が・・・」

「・・・それで？」

「だから・・・お前は死ねない」

なんだかよくわからないがとにかく私は死ねないと。そして、私が死ねないのはこいつのせい。人間って寿命じゃなくても死ぬものだと思つてたけどそういうわけではないらしい。まあ・・・とりあえず・・・

「私の寿命返せ！死ねないとかふざけないでよ！こんな退屈な世界で延々と生きていけつていうの？！」

「まあ、人間誰でも間違いはある」

「あんたは人間じゃないでしょ！」

完全に開き直りモードに入っている。最悪だ・・・

## 第二幕

こうなつたら意地でも死んでやる！死ねないなんてあんまりだ。いくら死に神の言つた事とは言え「あ、そうなんだ」あはははは「なんて易々と認められるわけがない。だいたい私がなにをしたというのだ。なにかの陰謀かなにか？平々凡々と生きてきた自分がなんでこんな目に遇わなければならないのだ！いくらなんでも理不尽すぎる。そりゃ、たしかに世の中理不尽なことだらけで納得できないこともいっぱいあるけど・・・例えば校則。制服でなければいけないっていうのは、まあ許せる。でもスカートの長さまで決まっていってというのは納得できない。どこが悪いのか理解できない。一センチ短かったりするだけで怒られたりする。理由を聞けば校則で決まっているからと。まったく理不尽だと思う。まあ、そんなもんだらうと結局は諦めているわけだけど・・・そんな感じで、理不尽という物はその辺に転がっているものだ。

そんなわけで、私は今ロープをもって近くの神社に来ていた。平日の午前十時にこんな所に来る人なんていない。来られたら大変だ。早まるな！とかいつて説得とかされてしまつたろう。そうなると非常にめんどうだ。だから学校をさぼって、あえてこの時間を選んだ。小さな神社ではあるが雑木林はある。万一人が来た時のために、林の中であることにした。なにを？当然首つりだ。細い枝だと折れてしまつかもしれないので太い枝を探す。随分太い枝が見つかった。太さ二十センチはありそうな枝だ。その枝にロープをくくりつけ、頭が入るくらいの輪を作る。踏み台にのつてその輪の中に頭を入れる。あとはこの踏み台をどかせば良いだけだ。

「せーの・・・！」

勢いをつけて踏み台を蹴る。完璧だ！これで死ねないわけがない！グッバイつまらない世界！！

バキッ！！



かん高い音を立てて枝が折れた。勢いをつけて踏み台を蹴ったため、私は地面に跪くかたちで着地した。

「嘘でしょ……？」

太さ二十センチもある枝がそう簡単に折れるはずがない。普通に考えたら絶対に。まさか……私そんなに体重が……いや、違う。絶対に違う。そんなのは認めない。認められるわけがない。きっとここ最近ずっと降り続いていた雨のせいで木が腐ってたんだ。そうだ。そうに違いはない。

「庚瑠莉香……お前、体重重いんだな」  
ドスッ！！

私は声の主、紅闇のミゾに思いつきり鉄拳をくらわせた。当然な仕打ちだろう。私の乙女心は深く傷ついたのだから。いたいけな乙女に発するまじき言葉だ。

「ぐ……！いきなりなにをする！」

「うるさい、黙れ」

抗議をしてくる紅闇に一発言いはなつてやった。そして、まだなにか叫び続けている紅闇を無視して私は歩き出した。首つりがだめなら次は……

私はビルの屋上にきていた。二〇階立てのビルだ。飛び降りなら確実に死ねないなんてことはまず考えられない。見事に即死のはずだ。フェンスを乗り越え、下を見る。さすがに高い。絶対にいける！むしろ逝ける！！

「とうっ！」

改造バッター人間よろしく高らかとジャンプをしてビルから飛び降りる。角度、初速度、落下速度、どれをとっても完璧なダイブだ！今度こそグッバイつまらない世界！！

ドサッ！

ひどく乾いた音がした。これは確実に死んだわね。ざまあみる紅

闇！私は死んでやったわよ！寿命を定められてるだかなんだかしらないけど、寿命のない私はそれに逆らってしんでやったわよ！って・ん・ん・ん・？それにしては感覚がしっかりしてるような・ん・

「こら、きみ！なにをしてるんだ！避難訓練のじやまになるから早くそのマットからどきなさい！」

え・ん・？マット・ん・？イヤな予感がして、目を開いて辺りを見回す。スーツを着た中年のサラリーマンの人が私を睨んでいた。自分が避難訓練に使われる大きなマットの上で寝ていることに気づいた。なんで・ん・？飛び降りる時には確かになにもなかったのに・ん・私が思考を巡らせている間も、その中年のサラリーマンの人は「早くどかないか！」などと叫んでいたが、私の耳には入ってこなかった。なんで・ん・？どこからマットが・ん・？考えてみてもその答えがわかるわけもなかったのだが、それでも思考はとまらず、私はふらふらと歩き出していた。

首つり、飛び降りがだめなら、もう飛び出ししかない！飛び出したったら絶対に大丈夫（というのなんか変だけど・ん・）だ！と言っわけ私は車の往来が激しい道路脇の補導にきていた。トラックやらダンプカーがものすごいスピードで走っていく。より現実性をあげるためにトラックに飛ばされることにしよう。そんな事を考えていると丁度良くトラックが走ってきた。時速は八十キロと言ったところだろうか。タイミングを見計らって、一気に飛び出す。

キーーーーー！というかん高い音のあとに、ドンッ！という鈍い音がし、私は跳ね飛ばされた。確かな手応えがあった。完璧に当たった。宙を舞っている。飛ばされている感覚。地面に身体を打つ感覚。私の身体はたしかに車にはねられ、地面に叩き付けられた。ハッピーエンド・ん・ん・だと思っただけならまたなにやら声が聞こえた。

「き・ん・君！大丈夫か！？」

声はひどく焦っていた。まあ、当たり前だろう。人を一人はねたのだから。業務上過失致死、というやつになるのだろうか？つていうか・・・ちゃんと声が聞こえるということはもしかして・・・ゆっくり目を開けた。アスファルトの地面と野次馬達の足が見える。ゆっくりと身体を起こす。痛みはまったく感じなかった。死ぬどころか無傷だった・・・運転手らしきおじさんが駆け寄ってきて私に声をかけた。

「大丈夫か！？ケガとかないか！？」

おじさんの問いに「大丈夫です。大丈夫です。」と答えた。おじさんは一安心したらしく、大きなため息をつき、

「急に飛び出してきたらダメじゃないか。無傷だったからよかったけど、普通は死んでいたんだぞ？」

と、言ってきた。イヤ・・・死にたかったんですけど・・・おじさんはまだ警察に連絡しなきゃとか、病院いつて精密検査をとか言っていたが、なんともないです。大丈夫ですから。と言い残してその場をさった。もう、何も考えられなかった。

### 第三幕

気が付くと私は自宅近くの公園にきていた。現時刻午前十一時三十分。小さな公園ということもあり、他に人は誰も居なかった。なんとなくブランコの所に歩いていき、座る。

「気が済んだか？ 庚瑠莉香。なにをしようとも、お前は死ねない。例え頭が吹き飛び、肢体がバラバラになろうが、心臓をえぐられようが、身体が粉々に砕け散ろうが。わずかに残った細胞から、お前は何度でも再生する」

さつきまで居なかったような気がするが、いつの間にか目の前に紅闇がいた。

「どうして……？」

「理由は説明した。お前に寿命がないからだ」

「どうして私がこんな目に遇わなきゃならないのよ！」

自分でも無意識のうちに声を荒げてしまっていた。他人のせいであんなことになったという事への怒り、この世界で永遠に生き続けなければならぬ事への絶望、こんな事になってしまったことへの哀しみ。いろんな感情が渦巻いた結果だった。

「私がなにをしたって言うのよ！ なにもしてないじゃない！ 平凡に生きてきただけじゃない！ なのに……なのになんで……！」

「……悪かった」

「悪かったじゃないわよ！ 謝られてなにかが変わるって言うの！ 私が死ぬようになるって言うの！？ あなた死に神なんでしょ？！ なんとかしなさいよ！ 返してよ……！ 私の寿命……ねえ……返してよ……！」

すでに怒鳴るというよりは絶叫に近かった。いつのまにか涙が流れていた。 ”死ねない” という事実が自分で思っていたよりもこたえていたらしい。私はうつむいた。紅闇なんかに泣き顔をみられた

くなかった。

「悪いが俺にはどうすることもできない。寿命を書いた書類は厳重に保管、封印をする。そして、その封印によって誰も書類にふれることはできない。そもそも、一端の死に神でしかない俺は書類がどこに封印されているのすら知らない」

頭の中が真っ白になり、紅闇の言葉など、全然入ってこなかった。何も考えられなくて、疲労だけが残っていた。急に体中が痛くなってきた。昼間車と接触したからだろう。どうせ死ねないなら、痛みも感じなくしてくれればいいのに。気が付くともう涙は止まっていた。

「唯一なんとかできるとすれば……」

「君、ちよつといいかな」

紅闇の言葉を遮って一人の男性の声が割り込んできた。顔を上げると四十半ばくらいの中年の男性が立っていた。まわりを見るが他に誰も居ない。どうやら瑠莉香に話しかけているようだ。

「いきなり失礼。私は生物学を研究している者なのだが。いきなりで不躰なのだが、君、死ねないというのは本当かい？」

目を輝かせて嬉々として私に尋ねてきた。なんなんだこの人は……どう考えてもあやしい。なんていうか……一言で表現するなら……キモイ。私が黙っていると、その学者（キモイ人）はその沈黙を肯定と受け取ったらしく、「そうかそうか」と嬉しそうに頷きながら話を続けた。

「私は不老不死について研究していてね」

と、突然自分の研究している事について熱く語り始めた。私は「はあ……」と、生返事だけを返していた。興味ないし、おもしろくも何ともなかった。ふと気づくと自分が制服を着ていることに気づく。いつものくせで制服を着てしまったらしい。よく補導されなかったものだ。運が良いというかなんというか……そんな事を考えていると突然一際熱い口調で、学者は言った。

「と、いうわけで、私の研究に協力してくれないか？」

「は？」

全然話を聞いていなかったため、なにが「と、いうわけで」なのかさっぱりわからなかったが・・・協力・・・？それって・・・

「君の身体を研究すれば、私の不老不死の研究は完成するかもしれない！礼はいくらでもする。協力してくれないか！？」

つまり・・・私にモルモットになれってことか・・・？こんなキモイやつに体中を調べられる・・・？考えただけで気持ち悪かった。はっきり言ってイヤ過ぎる。死ねないことよりもこいつのモルモットになるほうがもっとイヤだ。私は立ち上がり、学者に微笑みかけた。学者はなにか勘違いしたらしく「ありがとう！ありがとう！」とか言っている。私は学者に歩み寄り、そして

ドスッ！！

思いっきり鉄拳を突き立ててやった。「うぐっ・・・！」と、声をあげて学者は崩れ落ちた。「うううう・・・」と呻き声をあげる学者を無視して私は歩き去った。なんか妙に疲れた。どうせ学校もさぼってしまったし、家に帰って寝ようと思える。「ぐうぐう」おながが鳴った。時計をみたら丁度十二時だった。寝る前に昼食を食べようと思った。

## 第四幕

ピピピピピピピピピピ……

目覚まし時計が鳴り響く。いつもと変わらない朝。私が死ねないという事実を知ったところで、変わった朝がくるわけでもなく、いつもとまったく変わらない朝が訪れた。私はこの朝をどのくらい見ていくことになるだろう。何万回？何十万回？そんな数ではないだろう。何しろ私は死なないのだ。否、死ねないのだから……

いつものように登校。何も変わらない毎日。退屈な毎日。と、思っていたら今日はちょっとだけ変わっていた。通学路には昨日行つた公園があるのだが、そこにさしかかった時、昨日の学者が立っていた。どうやら私を待ち伏せていたらしく、私の姿を認めると駆け寄ってきた。もはやストーカーではないだろうか……

「さあ、今日こそは君の生態を研究させたまえ！」

昨日の事を怒っているのか、ただ本性が出ただけなのかかわからないが口調が昨日と全然違っていた。まあ、一日経って私が研究に付き合うことに同意するわけもなく……

「くるな変態！ロリコン！」

そう言つてやった。すると学者（キモイ人改めただの変態）は動揺し

「ばかな！これはれっきとした研究だ！いいか、君の生態構造が解明されればノーベル賞だつて夢じゃ……」

「黙れハゲ……」

ノーベル賞だろうがなんだろうが私は知ったことじゃない。私は学者（変態）に昨日同様みぞおちに鉄拳を突き立てようとした。しかし学者はそう来ることを読んでいたらしく、私の手を掴んだ。ニヤツと変態は怪しい笑みを浮かべた。キモすぎる……！しかし手を捕まれてしまつて鉄拳を見舞う事はできない。こうなつたら奥の

手だ

「キヤー！ー！！誰か助けてー！変質者！ー！！」

朝の通勤通学時間にこれは効くはずだ。学生だってサラリーマンだって出勤途中にここを通りかかるだろうし、私の悲鳴を聞いて近所の人達が駆けつけるかも知れない。作戦が効いたのか、学者は慌て始めた。

「ば・・・ばか！でかい声出すな！！」

これではまんま変質者である。まあ・・・実際私にとってはそうなんだけど・・・本気で焦ったためか学者が私の手を放した。チャンスだ。腹ががら空きである。私はこのチャンスを逃さず、思いつきりみぞおちに鉄拳を突き立てた。

ドス！！

と、鈍い音の後に変態の「う・・・」という声とドサっという倒れる音がした。昨日みたいに呻き声が聞こえない。どうやら気絶したらしい。まあ、自業自得だろう。私は学校へ行くために歩き出した。

私の通っている学校は成績の上中下でいったら中だ。落ちこぼれ高校というわけでもなく、県内きつての進学校というわけでもない。まさに普通の高校だ。しかし私立であるために、教師達は生徒達を少しでもレベルの高い大学へ入れるよう、少しでも学校の評判が良くなるようにと日々躍起になっていた。まあそんな、どこにでもあるような普通の私立の進学高校に私は通っていた。

「おはよう」と一言声をかけて教室に入る。クラスメイト達が一気に私に視線をぶつけた。しかし、視線を向けたのも一瞬で、すぐにまたそれぞれのグループとなにやらヒソヒソと話を始めた。私に挨拶を返してきた者はいない。なんだろう？なにかがいつもと明らかに違っていた。一昨日まではなんでもなく、普通にみんな私に接していたのに、なんていうか今日は・・・私を避けている・・・？なんだろう。その原因となるべき事は私にはなにも思いつかなか



った。まあ・・・こういうイジメをする根本の原因なんて本当に些細なことの方が多いんだろうけど・・・私の気づかない間になにかしてしまったのだろう。まいったなあ・・・どうせ永遠に死ねないのなら楽しく生きていきたいのに・・・

やがて担任の先生が教室に入ってきて、生徒達を席に着かせ、シヨートホームルームを始めた。出席をとり、簡単に連絡事項を伝えたと

「庚。昼休みに職員室に来なさい」と、私に告げた。

お昼を一人で食べたあと、私は言われたとおり職員室に向かった。職員室に呼び出されるなんて今までの人生で初めてだった。それほど私は可もなく不可もない、普通の生徒として過ごしてきた。一体何の用事だろう？普段平凡に生きている私にとって職員室に呼び出される原因なんて思い当たらなかった。いや、唯一思い至るとすれば・・・昨日学校をさぼったことか・・・？でもそんなことでいちいち呼び出すなんてするとは思えない。クラスにはまあ、不良と呼ばれてる人がいる。その人はたまに学校をさぼる事はあるが、職員室に呼び出された事はない。いつもホームルームで口頭注意をうけるだけだ。だから私もさぼりくらいで呼び出されることはないはずだ。はずだよな・・・うん・・・職員室に着くまでそんなことをずっと考えていた。

「失礼します」

職員室の扉を開いてからそう言って、中に入って扉を閉める。まっすぐ担任の机までむかい、イスに座ってなにやら作業をしている担任に「来ました。なんでしょうか？」と声をかける。担任は作業をしている手を止め、私の方を向いてから「来たか」と言って、多少怒ったような顔をして私に話始めた。

「庚、なんで呼び出されたかわかるか？」

「昨日、連絡をしないで学校を休んだからですか？」

と、私は職員室に来るまでに考えていたことを口にした。しかし、担任は私の予想に反して「それもあるが、本題は違う」と言った。本題は違う？本題と言われてもさぼったこと意外になにも思いつかなかった。自分はなにかしただろうかと考えていると担任がまたしやべり始めた。

「お前は自殺をしようとしていたそうじゃないか」

これは驚いた。そんな情報がもう学校側に届いていたなんて。まあ・・・制服から学校はわかるし、あれだけ野次馬ができていたなら誰か一人くらい連絡をする人がいるのも当たり前か・・・しかしどうやってそれが私だって気づいたんだろう・・・って、ああ、そうか。うちの学校は学年別にリボンの色が分かれているからあとは個人の特徴とかで私だって特定できるのか・・・などと考えていると担任から

「ちゃんと聞いているのか！」

と怒られてしまった。さすがにここで「いいえ」と答えるわけにはいかないのととりあえず「はい」と言っておいた。職員室に入ってからもう5分が経っていたが、どうやら話はまだ続くらしい。

「まったく。自殺未遂なんて、なにを考えているんだ？こんなことがマスコミにもれたら学校のイメージがダウンしてしまうではないか。せっかく諸先生方が君たちが少しでも良い大学に行けるようにとがんばっているのにそれを無駄にする気か？」

・・・普通・・・そういうこと言いますかね・・・？建前でも悩みがあるならきくぞ？とかそういうこと言いません・・・？私の自殺未遂より先生のその発言の方が問題なんじゃないんですか・・・？どこの学校も私立はこういうものなんだろうか・・・？なんか・・・イヤな感じ・・・

「とにかく、もう二度と自殺をしようなど考えるんじゃないぞ。わかったら下がちなさい」

「はい、失礼します」

私はそういって、一礼をしてから職員室を出た。

放課後。いつもの放課後。いつもと違う放課後……一昨日までならいつもつるんでいる友達二人と私の三人で一緒に帰って、帰り道でちよつと寄り道をしたりして帰っていた。でも今日は違う。他の二人は先に帰ってしまった。私はといえば、なんだか動く気になれず、自分の席に座ったまま外をぼーっと眺めていた。ふと人の気配がしたので振り返ってみると、そこに一人の男子生徒が立っていた。うちのクラスの問題児、一条雄太だ。問題児といってもタバコを吸うとか、万引きを何とかそういう悪さをしているわけではない。ただ、良く授業をさぼったりしているし、髪をオレンジに染めたりしている。当然染髪は校則違反だ。でも決して悪い人間ではない。むしろクラスの中心的人物だ。私も何度か話をしたことがある。その一条雄太が私になんの用があるというのだろう。他のクラスメイト達はすでに教室にはいなかった。

「庚。お前自殺未遂をしたって本当か？今朝からクラスの連中はその話で持ち切りだぜ？」

なるほど……私の自殺未遂はすでに生徒の耳にまで届いていたのか……通りでみんなの私を見る目がおかしいわけだ。しかし、そんなことをわざわざ聞きに来る一条は律儀というかなんというか……

「本当だよ」

私は一条君の問いに簡単に答えた。一条君は「そうか……」と、一言だけいうと黙ってうつむいてしまった。それからお互い一言も発さないまま五分程度たった頃、また一条君の方から口を開いた。

「なんでだ？」

「毎日が退屈だから」

「それだけか？」

「うん、そう。なんかさ、この世界って毎日毎日同じことの繰り返しじゃない？それがつまらなくて、そんな世界から抜け出したかったから。死んであの世にいったら、面白い世界が広がってるんだ

ろくなつて思つたからよ」

単調に答える私を、怒っているような悲しんでいるような、複雑な表情で見つめていた。また沈黙。私はなんとなく外をみた。グラウンドでは運動部が部活動に精をだしていた。野球のバットで打つ音。かけ声なんかが聞こえてきた。そんな風に外をみてぼーっとしている。「それは・・・」という声が聞こえたので振り返った。一条君はなにか「良い考えを思いついた」というような顔をしていた。「それは庚が楽しいことをなにも知らないからだ」

「そうかな？」

「そうだつて！俺が楽しいこと、いろいろ教えてやるよ！」

そういつて一条君は私の手を引いて歩き出した

「え・・・！ちょ・・・ちよつと・・・え・・・！ま・・・まっつて！」

突然の一条君の行動に慌てる私の抗議をキツパリと無視して一条君は歩き続けた。な・・・なんなんだこれは・・・！とりあえず今日一つだけわかったことがある。一条君は結構強引だ・・・

## 第五幕

私は今学校の近くの商店街を歩いている。一条雄太と二人で……これはいわゆる……デートというやつ……だろうか……？かなり一方的かつ強引にかり出されたという事実を無視すればまあ……立派なデートというものになるのだろう……。うん……困ったなあ……。何しろ私は男の子と二人でどこかへ出かけるという事をしたことがないのだ。なにを話したら良いのやら……。「知ってるか？」

「え？あ……。何？ごめん、聞いてなかった……。」「

「知ってるか？櫻庵のチョコアイスすげえうまいんだぜ？」

「へえ、そうなんだ。行ったことあるけど食べたことないなあ」

「なに！？けしからんヤツだ！」

「いや……。けしからんって……。」「

「ちよつとまってる！」

「え……。？」

そういうと一条君は走り去って行った。さて、どうしたもんか……。っていつても待つてると言われた以上は待つてるしかないんだろ。うな……。にしても突然連れ出したと思ったら今度は待つてるとか……。私に選択権はないっていうかやっぱ強引……。っていうか……。なんかそう考えたらだんだんムカついてきた……。戻ってきたら文句の一つでも言つてやろうか……。さあて……。なんて言つてやろうか……。

「お待たせ！ほら、櫻庵のチョコアイス」

「へ！？あ……。ありがと！」

「……。なんでそんなに驚いてんだ？」

「べ……。べつに！」

あんたに対する文句をひたすら考えていたから！なんてさすがにストレートに言えるわけがない……。

「ふん．．．まあいいや。それより溶ける前にアイス食べよ。  
マジでうまいから」

「もう十月も終わろうってこの時期にそんな早く溶けたりなんか  
しないわよ．．．」

「まあ、細かいことは気にするな」

細かくはないと思うんだけど．．．という突っ込みはとりあえず  
胸の内にしまっておこう。なによりも一条君の目が「さあ、食べて  
みてよ!」と、料理マンガの主人公ばりに語っていた。

「．．．おいしい!」

「だろ?」

アイスは懸命に勧めていただけであって確かにおいしかった。甘過  
ぎなくて、なにかはわからないけど香りが口の中に広がっていった。

「うん!こんなおいしいの食べたことない!」

そういうと一条君は「そうか」といって本当に嬉しそうに笑った。  
それは学校では見せないような、小さな子供が親に何かを自慢する  
ような、そんな無邪気な笑顔だった。

「意外と誰も知らないんだよね。みんな流行流行って雑誌に載  
ってるのかばっかり追うからこういう穴場に気付かないんだよね」  
そう語る一条君は学校で見る印象とは違った。私が持っていた印  
象はどちらかというと一条君こそクラスの先頭をきって流行を追っ  
ているような感じだった。見た目がチャラチャラしてるいてまさに、  
という感じである。クラス．．．いや、校内一目立っていると言  
って良いほどだ。さっきからの行動から察するに、一条君はきつと  
我が道を行く!という感じなんだろう。一条君が流行を追っている  
のではなくて、どちらかというと流行が一条君の後に続いていると  
いう感じなのだろう。一条君の違う一面をみたような気がしてちょ  
っと嬉しくなった。

「．．．ちよつとまった。嬉しくなったってなに．．．?なん  
で嬉しくならなきゃならないの!?一条君の違う一面をみたからっ  
て私が得することなんてない。断じてない。でも．．．うん．．

・ ・ ・ ？ なんだろう ・ ・ ・ うん ・ ・ ・

「ああああああ！！」

「ちよつ、な、なによいきなり大声だして！」

私の思考は一条君の声で強制切断された。いや、思考を切断されたのは良い ・ ・ ・ ここは夕方の商店街。買い物に来ている主婦や学校帰りの学生達がいっぱいいる。そして ・ ・ ・ その場にいる全員が何事かと一様に私たち二人を見ている。うう ・ ・ ・ 皆様の視線が痛い ・ ・ ・

「わりい！俺今日用事があることすっかり忘れてた！」

「え？え？」

「本当にわりい！また明日な！じゃあな！」

「え ・ ・ ・ ちよつとまつ ・ ・ ・ 」

私が声をかける間もなく一条君は走り去って行った。さっきまで二人に注がれていた冷たい視線はその場に取り残された私だけに注がれる事になった。私はその視線から逃れるように早足でその場を去ることにした。今日はいったいなんなんだろう ・ ・ ・ とりあえず一つだけわかるのは、一条雄太というのは女の子を強制連行した拳げ句に放置するという最悪な人だということくらいだろうか ・ ・ ・

## 第六幕

帰宅。当然のように両親ともいない。だからいつものように自分で玄関の鍵を開けて家の中に入る。なんか今日はいろいろありすぎて疲れた……。さつさとお風呂に入って寝よう。台所に入るとテーブルに千円札が一枚おいてあった。これで夕食を適当に買って食べろということである。もう何年も続いてきたこと。だが今日の私にはあいにく夕食を食べようなどという気はなかった。だがまあ、くれるものはもらっておく。私は千円札をしっかりと自分の財布にいれて自分の部屋に行った。

お風呂からでてもやはりなにもする気にはならなかった。そういえば現国でプリントの宿題が出ていたな。明日の授業に提出だっけ。・まあいいや・明日学校でやることにしよう。そう決めて布団の中に入るも眠気はまったくない。こういう時は気合いだ。目を瞑っていればいつかは眠りに落ちる。次に気づく時には朝になっているはずだ。よし、寝るぞ！私は気合を入れて目を瞑った。だがいつまで経っても眠れるような気がしてこない。しかたが無いので宿題でもしようと布団を出たところで携帯がなった。一年前に解散したバンドの曲。一時期は騒がれたりもしたもののだが、今では口にする人すらあまりいないのではないだろうか。携帯のディスプレイには「一条雄太」と表示されていた。そう、最低男君だ。このまま出ないで居留守を使ってやろうかと思ったが今日のことで文句を言っただろうと思い立ち

「もしもし？」

おもいつきり不機嫌な声で電話に出てやった。

「あ、一条だけど」

「そんなの携帯見ればわかるわよ。で、なに？」

「あゝ…………えっと…………今日は悪かったな」



「本当にね」

「え〜っと・・・怒ってる・・・よな・・・？」

不機嫌な声が効いたのか、一条君はしどろもどろになっているような気がする。なんだかおもしろいからもう少し続けてやろう。

「怒ってなんかいないよ。ただ、明日から一条君のことを最低君一号って呼ぶけど」

「いや・・・それは勘弁してください・・・」

「弁解の余地なんてあると思って？」

「いえ・・・ないです・・・」

昼間の強引さからはとても想像がつかないくらいに必死な感じだった。これは下手に文句を言ったりするよりもその何倍もの効果を発揮しているのではないか。一条君の様子に笑ってしまいそうになるのを必死に堪えて、不機嫌モードを演出することを続けた。

「ふむ」

「・・・勘弁してください・・・」

「えー」

「頼む！お詫びに俺の超おすすめのパフェおごるから！」

食べ物でつろうという作戦か・・・とも思ったがその超おすすめとやらを食べてみたいきもした。必死な一条君がだんだん可哀想な感じもしてきたし、そろそろ許してやろうか。

「ん〜・・・わかった、考えてもいいよ」

「本当か！？」

「そのパフェがどのくらいの物かにもよるけどね」

「その辺は大丈夫だ！明日の放課後とか大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

「よし。じゃあ明日な」

「うん。じゃあね」

そういつて私たちは電話を切った。私は結局宿題に手をつけず、再び布団に入り、目を瞑った。それにしても一条君の様子はとてもおかしかった。今度なにかあったら同じ作戦でいこうか、それとも

他の、別の戦法にしようか・・・などと考えているうちに私は自然と眠りに落ちていった。

## 第七幕

「おいしい」

「だろ？」

嬉しそうに、どこか誇らしげに一条君は言った。今私は昨日一条君が電話で言っていたおすすめのパフェを食べにきている。あれだけ薦めていただけあつてさすがにおいしかった。これなら合格点だ。許してあげてもいいだろう。うん。

「ここのパフェはどれもうまいんだ。なんていうか、他の店のとはなにかが違うんだよな。全部うまいけど、中でもそのイチゴクリームパフェが一番お薦めなんだよ。」

「へえ、そうなんだ」

それから一条君はいろんな店の、いろんなお薦めを語り始めた。あそこの喫茶店のコーヒーがおいしいとか、どのケーキは高いわりにたいしておいしくないだとか。私はその話に逐一相づちを打っていた。そろそろ店を出ようかという事になった時、突然一条君の携帯が鳴り始めた。一条君はちよつとごめんといって電話にでた。一分ほど話したあと電話を切った。なぜか一条君はゆっくりと私に振り返った。なにやら顔がにやけている。怪しい・・・怪しすぎる・・・っていうか・・・この表情はどこかで・・・

「庚、このあと暇か？」

「ま、まあ・・・暇だけど・・・」

この言い回しといい、表情といい・・・まさか・・・

「ちよつと俺に付き合ってみないか？」

超笑顔・・・ものすごく輝いている・・・

「つ・・・付き合うつて・・・どこに・・・？」

「まあまあまあ、いいからいいから」

「良くない！行き先くらい・・・ちよつ・・・ちよつと！」

ああ・・・またしても・・・一条君は抗議する私を無視して私

の手を掴んで、出口に向かって歩き出した。強引すぎる……っ  
ていうか私に選択の余地はないのね……。昨日の電話でのおど  
どした感じはどこへやら……。私の立場って……。

「着いたぞ」

「着いたぞって……。ここ……」

そこは街に唯一ある孤児院だった。院長がキリスト教徒なのか、  
創設者がそうなのか知らないが、教会があった。グラウンドがあり、  
遊具で小さな子供達が遊んでいた。私たちが中に入ると子供達はそ  
れに気づいたらしく、私たちのまわりに集まってきて一斉に話しか  
け始めた。

「雄太兄ちゃん今日もきたんだ」

「おう。ちよつとシスターに呼び出されたんだよ」

「その人だれ？ カノジョ？」

「んゝ残念ながら違うんだな」

「アイジン？」

「おまえ……。そういうのをどこで覚えたんだ……」

休み無く一気に話しかけてくる子供達一人一人に一条君はしっか  
りと言葉を返した。

ん？ またってことは……

「もしかして、昨日の用事って……」

「ん？ あれ？ 言ってなかったっけ？ 昨日もここにくるっていう約  
束があったんだけどすっかり忘れててさ……」

「そうだったんだ……」

またしても意外な一面である。確かに深い関わりがあったわけ  
はないが、半年間同じ教室で、一緒に学校生活を送ってきている。  
しかも一条君の行動はとも目立つ。一緒になって騒いだこともあ  
った。しかし、こういう一面をもっているなんて想像もつかなかっ  
た。一条君はかなり奥が深い人だ。もともとと一条君の事を知り  
たいと思った。なんとなく……。そう、なんとなく。

コンコンつとドアをノックして「失礼します」といつてから中にはいる。事務作業をしているらしい中年の女性が机に向かい、なにやら書類を書いていた。ちよつとだけ書類から目を離し「そこ座つてちよつとまっついていてちよつだい。もう少しで終わるから」といつてまた書類に目を戻した。暇だったので部屋の中を観察してみる。本棚、ソファ、壁に掛けられた時計、部屋の中には事務机。特にこれといつて飾り気のない部屋だった。

「待たせてしまつてごめんなさいね」

作業が終わつたのか、女性はさういふと私たちの向かいのソファに腰掛けた。

「急に呼び出してごめんなさいね、雄太。子供達があまりにも雄太と遊びたいつて言うものだから」

「いえ、俺はまつたくかまいませんよ」

「ところで、そちらのお嬢さんは？」

「あ、庚です。庚瑠莉香です」

「学校の友達です」

「そう。あなたがここに友達を連れてくるなんて珍しいわね」

どこかからかつているような、でも本当に嬉しそうに女性は言った。一条君は「あははは・・・」と、苦笑いを浮かべた。

「私は橘と申します。一応この孤児院の院長をしているわ。子供達からはシスターつて呼ばれているから、あなたも気楽にシスターつて呼んでちよつだいね」

さういふと女性、シスターは優しく微笑んだ。どこか子供っぽさが残っているような笑顔だった。とても人がよさそうな感じ。こういう人は子供から好かれるんだろうなあ。

バンツ！と大きな音を立てて、いきなりドアが開いた。驚いてそちらを見ると、4、5人の子供達がいた。

「ドアを開ける時はまずノックをしてからよ」

「あ、いけね。忘れてた。次からは気をつけまーす」

注意している声も優しい感じだった。怒っているような雰囲気はまるでない。注意に対して素直な反応を見せる子供達からも、シスターと子供達との信頼関係がしっかりと成り立っているのだろうと感じた。

「雄太サッカーやろうぜ！」

「おう。庚、お前も来いよ」

「え？だって私サッカーなんて・・・」

「いいからいいから」

「ちょ・・・ちよつと・・・」

一条君は私の手を引いて先を歩く子供達に続いた。やっぱり強引だ・・・しかし、不思議と嫌な感じはしなかった。

「いつてらっしゃい」

シスターが優しく微笑み、私たちを見送りだした。

## 第八幕

すっかり暗くなった空の下を、一条君と二人で歩いた。元々そんなに子供が嫌いではないということもあり、子供達とのサツカーは意外にも楽しかった。まあ・・・おかげで制服は汚れてしまったけど・・・でもまあ、あんなに楽しいと思ったことはずっとなかったから、よしとしよう。そういえば一条君はなんで孤児院に出入りしてるんだろう？一条君と孤児院・・・共通点はないように思えるんだけど・・・

「ねえ、一条君はあの孤児院と結構交流があるみたいけどどういいうきさつで出入りするようになったの？」  
気になったので聞いてみることにした。

「ん？ああ・・・実は俺も昔あそこにいたんだ」

「え！？だって、お父さんとお母さんいるんでしょ？」

「ああ。たしかににいるけど、血は繋がってないんだ。中学まで孤児院にいて、高校に入る頃に養子に出されたんだよ。物心ついたころにはもう孤児院にいた。だから血の繋がった本当の親を俺は知らないんだ」

「会いたいつて思ったことないの？」

「ん・・・小学生くらいのころはそう思ってたかな。でも、院のやつらもいたし、シスターが母親代わりみたいなもんだっただから中学に上がる頃には、そんなのどうでも良くなってたな」

「そうなんだ・・・」

「ああ。それに、今の義父さんも義母さんも良い人で、俺を本当の子供みたいに扱ってくれるから。今はもう、本当にどうでも良いな」

淡々と話す一条君とは逆に、私はどういう反応をしたらいいのかわからなくなってしまった。それからお互いにも話すことなく歩いていった。うーん・・・好奇心猫を殺すとはこのことだろうか・

「なあ庚、お前、まだ退屈だから死にたいとかって思ってるのか？」

いつもの軽いような口ぶりとは違い、ものすごく真剣な声で一条君が尋ねてきた。

「そうね・・・たしかにまだこの世界はつまらなくて、相変わらず退屈だなんて思うよ。でもね、最近ちよつと思ひ直したことがあるの。あのね、一条君。私、やっぱり生きて行こうかな。つまらなくても、退屈でも・・・こんな世界でもさ、なんか捨てたもんじやないような気がする。楽しいなつて思えることも、ちゃんとあるんだなつて。だから、もう自殺しようつていうことは、思つてないかな」

「そうか、そりゃよかったよ」

一条君は本当に嬉しそうに笑つて、よかったよかった。と繰り返して言った。私が生きていてもいいやつて思えたのは、一条君がいろいろ楽しいって思えることを教えてくれたから。そういうの、一条君は自覚してるのかな？してないんだろぅな・・・してたらしてたでなんか嫌だけど・・・

「あのさ、庚」

ん?

「なんだかまた声が真面目になっている。また何か重い話・・・？俺さ、お前が死にたいって思うのやめてくれて、本当、マジで嬉しいよ。クラスのやつからそういう話聞いた時さ、まさかって思ったよ。ウソだろ？って。お前が死ぬなんてことになったら、本当に俺、どうしたらいいかわかんなくなっちまうよ。だって俺さ、庚のこと、好きだから。だから、俺と付き合ってほしい」

「・・・・・・・・へ・・・・・・・・？ええええええええええええええええ



ええ」

「ああ．．．いきなりこんな事言われても困るよな．．．でも、マジなんだ」

「え．．．あの．．．えつと．．．」

びつくりだ。まさか一条君が私のことをそういう風に見ていたなんて思いもなかった。一条君はだいたいの人には同じように、優しく振る舞っていたりする人だから、私もその中の一人だと思っていた。っていうか．．．ものすごい突然すぎやしませんか．．．？

「すぐには言わないけど、お前の気持ちを教えてほしい」

私の．．．気持ち．．．私の気持ちは．．．

「えつとね．．．私も．．．一条君の事が好きだと思う」

「マジで．．．？」

「うん」

「え．．．ってことは．．．じゃあ．．．」

「うん。私でよければ、よろしく願います」

「あ．．．あはははは．．．よかった．．．ふられたらどうしようかと思った．．．俺、告白なんかしたことねえし、どうしたらいいかとかわかんなかったし．．．ああ、でもよかった。本当によかったよ」

「あはははは。最初からそんなスムーズにいける人なんてたぶんそんなにいないよ。それにしてもびつくりした。まさか一条君から告白受けることになるなんて」

「ああ．．．」

「ん？」

「あのさあ庚。その”一条君”ってのやめねえ？雄太でいいよ」  
「え？」

「いや．．．なんつーかほら．．．よそよそしいっていうか．．．ただの友達みたいっていうか．．．」

そう言う一条君の顔は暗がりでもわかるくらい真っ赤なっていて、ものすごく照れているようだった。そんな一条君がなんだかおもし

るくて、そして、可愛いと思えた。

「うん、わかった。じゃあ、雄太も私のこと庚じゃなくて”瑠莉香”ってよんでね」

「ま・・・マジで・・・？なんか・・・ちよつと恥ずかしいんだけど・・・」

「そんなの私だつてそうよ。お互い様よ。わかった雄太？」

「わ・・・わかったよ・・・る・・・瑠莉香」

「よろしい」

それから私たちは歩きながらいろいろな話を話した。毎日電話しようとか、一緒に帰ろうとか。なんとなく恥ずかしいからクラスメイト達にはばれないようにしようとか。そんな話を話しているといつのまにか別れ道についていた。私は交差点を右、雄太は左をいくのだ。

「じゃあ瑠莉香、またあとで電話するから」

「うん。待つてるよ雄太」

そういつて私たちは別れた。これからはきつと、退屈をしない、楽しい毎日になるんだ。きつと、ちよつとだけ世界が変わって見えたりなんかするんだろう。そんなことを考えながら、私は家路にいった。

## 第九幕

朝。いつもと同じ朝。いつもと同朝。私たちに訪れた変化のことなどお構いなく、いつものつまらない毎日が繰り広げられていく世界。私たちにとっては、新しい世界。

教室での私へのみんなからの無視攻撃は続いていた。でもそんなことは全然きにならなかった。雄太だけが側にいれば、他になにもいらない。クラスで無視されようがなにしようがそんなことはどうでもよかった。私たちは毎日のように放課後商店街や孤児院に行った。とても楽しい毎日。本当に世界が変わって見えた。何もかも。こんなことというのはちょっと恥ずかしいけど、雄太と一緒に過ごす時間がとても幸せだった。こんな幸せな時がずっとずっと、続いて行きたらいいな。そんなことを雄太と二人で歩きながら考えていると雄太が言った。

「俺、今瑠莉香といえすげえ幸せだよ。これからもずっと一緒に居よう。一緒に高校卒業して、おっちゃん、おばさんになって、じいさん、ばあさんになるんだ。先に死ぬんじゃないぞ。死ぬなら、一緒に死にたいよな」

ああ、雄太も同じようなこと考えてたんだ。そう思うと嬉しくなつて、でもなんか可笑しくなつて、つい笑ってしまった。そしたら雄太がちよつと拗ねた感じで「なんだよ、笑うことないだろ」といったので「違う違う」と否定した。笑いながら。

「私も、今同じ事考えてた。二人で同じ事考えてたなんて、ちよつと不思議だね」

雄太は「そうか」というとまたあの子供のような笑顔を覗かせた。

「でもね」

「ん？」

「一緒に死ぬっていうのは、無理があるかな。私は絶対に、雄太より先に死ぬ事も、一緒に死ぬこともないから」

「意地でも長生きしてお前と一緒に死ぬさ」

「違うの。雄太はいつか必ず死ぬから」

雄太からさっきまでの笑顔が消えた。

「それはお前だつて一緒だろ？人間だつて生き物なんだ。いつかは必ず死ぬだろう」

「ううん。私は死ねないの。どんなことがあっても、何年、何十年・・・何百年経つても私は死なないの」

「・・・どういふことだ？」

「私が初めて自殺をしようとした次の日、朝起きたら私の前に死神が現れて、お前は死ねないつて言ったの。俺がお前の寿命を書き忘れたから死ねないつて。普通に考えたらそんなこと信じられるわけないでしょ？だから、私はいろんな事を試した。首つり、飛び降り・・・でも死ぬどころか傷一つおうことなかったの。ただの偶然にしてはできすぎてるでしょ？それも一回だけじゃなくて、何回も続くなんて。たぶん、私は本当に死ねないんだと思う。だから、私が雄太より先に死ぬなんてことも、一緒に死ぬつていうこともできない」

「はは・・・まさか・・・そんなの非現実的過ぎる」

「信じる信じないは雄太の自由よ。でも、事実なのよ。ほら、そんな顔しないの！一緒に死ぬことはできないけど、でもそれはずっと、雄太が死ぬまで一緒にいられるつてことなんだからさ」

雄太は黙ったままだった。それから私たちはお互いなにも話すことなくただ歩き続けた。黙々と歩いていると小さな公園についた。公園では子供達がサッカーをしていた。とても楽しそうにボールを追いかけている。一人の子がボールを蹴った。見事に誰もいないところにボールがとんで、そのままボールは公園から道路に出てしまった。ボールを蹴った子が道路に出たボールを取りに走ってきた。ボールを取つてあげようと私がそっちに向かおうとしたとき、向こう側からトラックが走ってくるのが見えた。このままでは子供がトラックにはねられてしまう。

「あぶない！」

そういつて私が衝動的に走ろうとするより早く、雄太が走り出していた。

そして………

そこからのことは映像をスローモーションで見ているような感じだった。トラックにはねられる寸前のところで雄太は子供を突き飛ばした。そして雄太は……

トラックに跳ね飛ばされた。人形が中を舞うように、雄太が宙に舞う。

「雄太ーーーーー！！！」

私は叫びながら雄太に駆け寄った。雄太の身体からおびただしい量の血が流れ始めていた。降りてきたトラックの運転手が警察と救急車を呼んでいた。

「雄太！雄太！しっかりして！」

私の声にも何の反応もしめさない。地面が雄太の血で赤く染まっていく。

「雄太！雄太！雄太ああー！」

私は必死に声をかけ続けた。しかし、救急車が到着して病院に搬送されるまで、雄太の意識が戻ることはなかった。

## 最終幕

病院に搬送された雄太はすぐに手術が施され、集中治療室に入った。手術は一通り終わったが全身を強く打ったため安定のしない状態が依然続いていた。いつその命の灯が消えてもおかしくない状態だという。家族でもない部外者である私が集中治療室に入れる訳もなく、ならばせめて待合室で思ったが外来診察の時間終了とともに追い出されてしまった。仕方なく家路につく。幸い、雄太のお母さんが気を効かせてくれて、何かあったら私の携帯に電話をしてくれるらしい。非常な物だ。いくら恋人とはいえ、家族ではないからという理由で側にいられない……

家についても何をする気にもなれず、自分のベッドに座ってぼーっとしていた。急にここ数日の出来事がフラッシュバックした。雄太に無理矢理商店街にかり出された。パフェを食べた。孤児院に行った。そして……子供の身を守るためにトラックに……ものすごく悲しいはずなのに涙は出なかった。雄太はどうなってしまったらう。回復して、また私と一緒に楽しい毎日を過ごす事ができるのだろうか？それとも……

「久しぶりだな、庚瑠莉香」

私の目の前に、また突然現れた。

「なによあんだ……今更私になんの用があるというの？」

「一条雄太は今日死ぬ」

死神紅閨が静かに淡々と、高校生が小学一年生の問題を解くみたいに易々と私に告げた。

「なによそれ……そんなこと……そんなことわざわざ私に言うために現れたってどういうの！？」

「一条雄太を助けたくはないか？」

「なによ……なんなのよさつきから！わけわかんないわよ！なにしにきたって言うのよ！？消えて……今すぐ消えてよ！！」

「お前が自分の命を差し出すなら、変わりに一条雄太を救ってやる。ただし、その場合お前は天国にも地獄にもいけず、彷徨える魂となる。それでも良いのなら・・・」

「いいよ」

紅闇が全て言い終わる前に私は口にした。雄太のいない世界なんて生きている意味はない。また前みたいに死を追い求めて彷徨うだけだ。ならばここで雄太の命を取り繋いだ方がよっぽどいい。こんなことを雄太が知ったらなんて言うだろう。喜ぶなんてことはないだろうな。でも、それでも、私は雄太を・・・

「では、行くぞ」

そういつて紅闇は私の額に手を当てた。紅闇の身体から光が放出され、暗い部屋を照らした。ベッド、机、本棚、部屋中の全てが青白い光に照らされる。机の上に置いた携帯電話が着信を告げた。目だけを動かして携帯のディスプレイを見る。そこには「一条雄太」と表示されていた。私は固く目を瞑った。頬を涙が伝う。さようなら、雄太・・・

私の意識はそこで途切れた。

## エピローグ

誰かが俺を呼ぶ声がする。目を開けようとしたが開けることができない。誰だ、俺を呼んでいるのは……？ 目を開けられないので相手が誰なのかを特定することができない。声からして男のようだが……

「一条雄太、お前は死から脱した。そしてお前はこれから先、なにをしようとも死ぬことはできない。例え頭が吹き飛び、肢体がバラバラになろうが、心臓をえぐられようが、身体が粉々に砕け散ろうが。わずかに残った細胞から、お前は何度でも再生する。そうして何十年、何百年、何千年の時を永遠に生き続ける」

何を言っているんだろう？ 人間だって生き物だ。生ある物いつかは必ず死ぬ。死ねないなんて事はない。ああ……そういうえは瑠莉香もそんなこと言ってたな。常識で考えたら信じられないけど、瑠莉香がそういうんなら信じようって思ったんだ。なあ、瑠莉香……俺も死ねない身体になったんだってさ。これで二人でずっと……永遠に生き続けられるな……退院したら、またいろんな所行こうな。まだまだたくさんお薦めの店があるんだぜ。誰も知らないような、夕日が綺麗に見える場所とかさ。そういう所、二人で一緒に行こうな。何年かしたら結婚してさ、家庭を築いて、ずっとずっと……何年も、何十年も、何百年も……ずっと一緒に居ような。ああ……なんかまた眠くなってきたよ……俺、いまからすげえ楽しみだよ。意地で、速攻で治して退院するからな。待っていてくれよ、瑠莉香……



## エピローグ（後書き）

みなさん初めまして、神無月帝婁と申します。  
以後よろしく願います。

この作品が僕の人生の中で初めて「小説」という形で書いた文章となるわけですが、いかがだったでしょうか？

変な言葉遣いがあったりとか、間違った文法がなかったとか、確認はしているものの不安でなりません・・・

Death Desireを最後まで読んで頂きありがとうございます。  
しました。

感想なんかをいただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3712a/>

---

DeathDesire

2011年1月6日14時11分発行